

前原健寿

医学部附属病院 脳神経外科 教授/診療科長



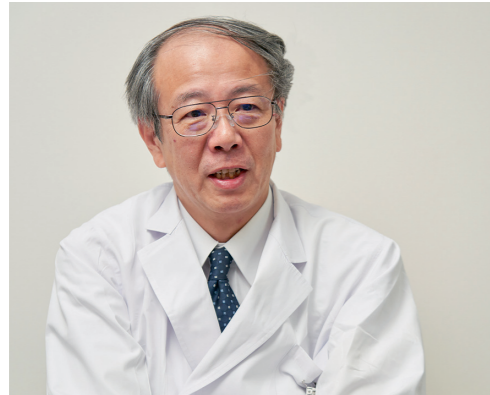
手術には手先の器用さよりも 臨機応変な“脳の器用さ”が必要

科的治療を行う。その中で、てんかん手術の専門医としてキャリアを積んできた。

「学生の頃、脳や脊髄の機能に興味を持ったことが脳神経外科に進んだきっかけです。脳外科手術は体力勝負というイメージがあり、私も助手時代には最長で連続30時間以上の難手術を行いました。しかし、今は術式も機器類も進歩したので、高度な手術が短時間で可能になりました。薬では抑えられない難治てんかんも、手術により発作の消失や軽減ができるのです。脳内に埋め込んだ電極で発作を検知し、電気刺激を与えて治療する方法など、新しい治療法も多数開発されています」

医師として必要なことはサッカー部で養われた

脳外科医になって間もない頃は、今のようなトレーニング用人工血管やシミュレーション技



医学部附属病院 脳神経外科
前原健寿 教授/診療科長
まえはら・たけとし

1985年東京医科歯科大学医学部卒業。1995年博士号取得(医学博士)。東京都立神経病院脳神経外科、東京医科歯科大学脳神経外科助手、講師を経て、2012年より現職。同大学院医歯学総合研究科医歯学系専攻認知行動医学講座脳神経機能外科学分野教授も兼任。日本脳神経外科専門医、日本脳卒中学会専門医、日本てんかん学会専門医。てんかんの外科治療が専門。研究領域としては、てんかんの病理学的解析と治療、頭蓋内電極を用いた脳機能の解明に取り組む。

術のない時代。若き前原教授は夜な夜な手術室に入り、牛乳瓶の底に入れたガーゼを顕微鏡で覗きながら縫合のトレーニングに取り組んだ。

「手術には手先の器用さよりも重要な要素があります。自分の能力に応じて作戦を立て、とっさに判断し、何かあったときでもリカバリーできる、いわゆる“脳の器用さ”です」

さらに前原教授は、手術に求められる要素としてチームワークを挙げた。前原教授は、中学から大学までサッカー部に所属。現在では東京医科歯科大学サッカー部の顧問を務めている。サッカーを通してチームプレイを学んだという。

「学生時代は真面目に勉強をするタイプではありませんでしたが、サッカー部ではチームプレイの大切さ、試合ごとの役割、役割に応じた動き方など、医師として不可欠なことが学べたと

顕微鏡を覗き込みながら、脳の一部を切り出す脳外科医の前原健寿教授。てんかん手術のスペシャリストとして、日々手術室で神経を研ぎ澄ましている。



学生時代はサッカー部に所属(前列右から3番目)。チームワークの大切さと個人の役割を学んだことは臨床現場でも生かされている。

その日に行う手術は、朝の通勤時に脳内でシミュレーションしてあるので、手術室では余計なことは考えません。私にとっては、手術室が一番集中できる場所です」

そう話すのは、脳神経外科の前原健寿教授。東京医科歯科大学の脳神経外科では、脳腫瘍や脳動脈瘤などの脳血管疾患の外

思っています」

**脳機能の解明に向け
臨床研究にも力を注ぐ**

前原教授が率いる脳神経外科では、診療科内のチームワークはもちろん、神経内科、精神科、小児科など、他科と連携した取り組みも多い。日本各地のてんかんセンターと連携した活動など、学外の研究者や医師と協力しながら、てんかん治療の質向上にも努める。

臨床医としてほぼ毎週手術をする一方、研究者としての顔も持つ。最近では、次世代の育成が大きな課題だ。

「脳の機能に興味がある学生には、ぜひ研究もできる臨床医を目指してもらいたい。私も脳の機能を解明したいという思いで研究を続けています。最先端の治療を積極的に取り入れるなど、研究成果を臨床に生かしていきたいと考えています」